

郷土史への扉



大隅正八幡宮跡の発掘調査

しよう

今年の五月から七月にかけて、鹿児島神宮の駐車場の一角が初めて発掘調査されました。国や県の支援のもと、遺跡を保存し、将来的には整備を行うという目的で調査したものです。鹿児島神宮はかつて大隅正八幡宮と呼ばれ、大変繁栄していました。その当時の建物の跡などを見つげるためです。

鎌倉時代の初めの一一九七年に作られた記録に「大隅国建久田帳」があります。田んぼの面積や持ち主などが書かれた土地台帳です。それによると大隅正八幡宮の社領は、大隅国内はもちろん、隣の薩摩国にもあり、合計すると一五〇〇町にもなりました。一五〇〇町という面積がどのくらいかといえますと、一町の長さは一〇九畝、面積は九九一七平方尺ですから、一五〇〇倍で、およそ四五〇万坪の広さにな

ります。そんな広さの領土をもっていた神宮は、たくさんの人たちが関係し、富や文化・情報なども集まってくる場所でした。神宮の仕事を受け継いでいたのが、四社家と呼ばれる桑幡・留守・沢・最勝寺さんです。数年前から、この四社家の人たちが住んでいた館跡が発掘調査されるようになってきました。すると、四社家の館跡すべてから幅三〜七畝、深さ三〜四畝の堀跡が見つかりました。戦国時代には、まわりを堀と土手で囲んで防衛を厳重にしていたのです。まるで城のようです。館の大きさは、およそ百畝四方で、学校の校庭ぐらいの広さでした。今でも桑幡・留守さんの家では、堀の内側に作られた三畝の高さの土手(土塁)が残っており、当時の面影を偲ぶことができます。

留守・沢・最勝寺さんです。数年前から、この四社家の人たちが住んでいた館跡が発掘調査されるようになってきました。すると、四社家の館跡すべてから幅三〜七畝、深さ三〜四畝の堀跡が見つかりました。戦国時代には、まわりを堀と土手で囲んで防衛を厳重にしていたのです。まるで城のようです。館の大きさは、およそ百畝四方で、学校の校庭ぐらいの広さでした。今でも桑幡・留守さんの家では、堀の内側に作られた三畝の高さの土手(土塁)が残っており、当時の面影を偲ぶことができます。

この四社家の館跡の発掘調査では、平安く鎌倉時代や室町時代の中国・朝鮮、東南アジアなどの海外の焼き物もたくさん見つかり、神宮の繁栄ぶりというかがうことができました。神宮あつての四社家ですから、神宮は城に例えると、本丸に相当する場所です。

今回初めての発掘調査では、およそ

八〇〇年前の穴や建物を建てるための五〇〇年前に整地した跡(地業層)、東南アジアのタイで作られた四五〇年前の壺などが見つかり、神宮の古い様子が少しずつ分かってきました。

神宮の建っている

場所は、後ろに山があり、そこから突き出た、ちようど舌のような形をしている舌状台地です。この台地には古くから人が住んでおり、縄文土器や弥生く古墳時代の土器もたくさん見つかりました。台地の標高は三〇〜五〇畝で、台地の縁には、およそ七〇〇年前の宮坂貝塚があります。九州でも古い、縄文早期の貝塚です。そのころは、近くまで海が入り込んでいたのです。弥生く古墳時代の土器は、鹿児島神宮の歴史が始まる、中央に服属する前に、地元の人たちがここに住んでいたことも示しています。

現在の神宮の建物は、江戸時代の宝暦六(一七五六)年に建てられたといふことで、県指定文化財(建造物)になっています。今までは、鹿児島神宮の歴史については、残っている古文書などの記録から調べられてきましたが、



鹿児島神宮



発掘調査で出てきた土器

ようやく地中に埋もれているものから、調べるができるようになりました。この神宮のある宮内地区は、鹿児島県の歴史にとつても大事な場所です。いろいろな角度から調べる必要があります。

文 重

お知らせ

- ◎国分郷土館が休館します。
8月17日(月)~9月11日(金)まで、屋根改修工事のため休館いたします。詳しくは、文化振興課文化財グループ☎(42)1119までお問い合わせください。
- ◎文化財の盗難・火災多発!
国内で文化財の盗難や破壊、放火などの事件が多発しており、県内でも田之神像の盗難事件が発生しました。市内でも過去に数例あり、返されたものはほとんどありません。文化財は一度破壊されると、元に戻すことは非常に困難です。文化財は国民共有の財産です。後世に伝えるため、文化財を大事にしましょう。